

⑤ こういう時代われわれは「どう生き」「どう描いて」ゆくべきなのだろうか。

家庭にあっては女房と別れる勇気もないのに、

A、頭は常に女と男のバカ気た結びつきが、カラをついて離れない。経済性と女と男の命令権。そして女房とは「ナニ」だろうか。普通名詞としての女。人間の観念としての女。それは男に都合がよかったのだろうけれども、それ以上に、権力の座を護る政治的なものとしての方が、からみついて、ドチラをも傷つける。そういう時、一番の願いは、男が女になる性転換だ。呑んで帰って怒られていた亭主が、翌朝、同じ女性となっている時、女房は果して怒るだろうか。まず、最初に、資本主義国日本の主婦が、頭にくるのは生活権の問題だろう。

女性側にしても、やはり男になる権利はあるだろう。一九六〇年の九州派グループ展で、田部光子が人工胎盤を出品したのも、その辺の事情があったのかもしれない。とにかく個人的理由としても、私など非常に女性的なのに（よく友人と二人で呑屋にゆくと、奥様と間違われる、それもたびたびで、肩がなで形で、声が高く柔らかい）それでいて、女性というだけの女房と、子供のためにかせがねばならぬという不合理以上に、同居する義務があるうとは、神様が死んでしまった今日、誰に祈れば、この難問題は解決するのやら、医学に無知だとはいえ、性転換に全神経を向けるのも結局は、それしか救いがないことを知っているからなのだ。

B 資本主義国は修正資本主義化しており、社会主義的予測では、思いもよらない地滑りの現象の兆し—消費者王様の連盟階級群が発生している。それと対比的なのが中ソ論争だ。中ソ論争の当否は知らないが、社会主義化の過程にも、種類があるということの、論証みたいなものだろう。学術的にも信仰的にも、神体が二頭であれば、どうしても疑問が沸き、学術的には論争が行われ、信仰的には迷信権力的には陣営の分割が起って来るのは当然だろう。にもかかわらず、それが前近代的、原始的素材としてほっぽり出されているのが、アメリカでは黒白の人種問題、中ソ国境問題。

と考えると、ここにも、命令者、即ち神々の死んだ悲劇が起っている。